

2019年(平成31年)3月23日 土曜日 (徳島新聞)

## 「沿岸海洋に関する国際会議」研究発表

小松島市出身で愛媛大大学院理工学研究科の佐川奈緒さん(24)が、オーストラリアで開かれた国際的に権威のある「沿岸海洋に関する国際会議」(河口沿岸科学協会主催)でプラスチックごみによる海洋汚染につ

いて研究発表し、学生の第1席「最優秀学生賞」を受賞した。広島県の広島湾でマイクロプラスチックの種類やサイズを調べた成果を報告。マイクロプラスチックの分布把握に寄与すると評価された。

# 佐川さん

(小松島市出身)  
(愛媛大大学院)

## 第1席



佐川奈緒さん

佐川さんはマイクロプラスチックの発生源を解明しようと、2016年から広島湾での研究を始め、大学の調査船を使うなどして海岸、海面、海底の数十地点で漂着・漂流ごみや泥を採取した。約5千のサンプルを解析した結果、プラスチックごみの平均サイズは海岸で2・3ミ、海面1・3ミ、海底1ミと微細化するほど海底に蓄積する

## 広島湾でプラ汚染調査 ごみ分布「地域差」示す

ことや、大半が発泡スチロール由来と突き止めた。数千人が研究発表を行った。

広島湾ではカキの養殖が盛んで、いかだに使われる浮きなどが劣化して海中に広がったと分析。「別の研究者による東京湾の調査では、ごみの大部分はペットボトルやポリエチレンの素材などで、瀬戸内海特有の結果となった。プラスチックごみにも地域差があると明らかになった」とし

佐川さんは、4月から横浜市にある環境コンサルタント会社運営の研究所で働く。「海洋汚染対策に携わる立場として、プラスチックを少しでも削減できるよう研究と啓発に尽力したい」と意欲をみせている。

国際会議は毎年、各国で開かれ、海洋環境や生物の多様性などについて考えている。今回は学生

(富士佳輝)

Q マイクロプラスチック 陸上や海洋のプラスチックが紫外線や熱などの影響で0・3〜5ミに微細化したもの。海中でさまざまな有害物質を表面に吸着する性質を持ち、海洋生物が誤飲・誤食することで有害物質が体内に蓄積する。